



からしだね

2023年5月号
(592号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任： 中村克徳司祭

住所： 〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL： 072-751-2400 FAX： 072-753-4624

URL(ホームページ)： <http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



本号の記事の主題など

巻頭言「使徒職の召命」

教皇フランシスコ

5月のガラスケースのみ言葉と解説

主は復活された ハレルヤ！

聖なる過越しの三日間

大人の日曜学校だより (2/26)

大人の日曜学校だより (4/23)

3年振りに復活祭のパーティーが開催

宝塚黙想の家からのお知らせ

今月の表紙の絵について

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、おはようございます。

今日から新たな講話を始めます。キリスト者の生き方にとって差し迫った決定的なテーマ、宣教への熱意、つまり使徒としての情熱についてお話しします。これは教会にとって、重要な側面です。イエスの弟子の共同体は、実際、使徒として、また宣教者として誕生しました。人を改宗させるために生まれたものではありません。まずは、わたしたちはこの区別をしなければなりません。宣教者として、使徒として福音宣教することは、改宗させることと同じではありません。これらはそれぞれ何の関係もないのです。福音宣教することは、教会の重要な側面に関係しています。イエスの弟子の共同体は、使徒的な宣教者として生まれました。聖霊は教会を外へ向かうように形づくります——外へ出ていく教会です——ですから教会は自らの中に閉じこもるのではなく、外へ出て、イエスのあかしを人から人へと伝えていくのです。信仰もまた人から人へ伝わります——地球の隅々にまで聖霊の光を輝かせるために広がっていきます。しかしながら、使徒としての熱意や福音の良い知らせを他者に伝えたいという願望が弱まり、形だけのものになってしまうことがあります。時々、その輝きを失うように見えることがあります。そうすると、「閉鎖的な」キリスト者となり、他者のことを考えなくなります。キリスト者の生き方で、福音宣教、福音の宣言という目標を見失ってしまうと、病んでしまいます。自らの中に閉じこもり、自分のことだけを話し、ついには退化します。宣教への熱意がないと、信仰は薄れてしまう一方で、宣教はキリスト者の人生の酸素と言えます。宣教によって、キリスト者の人生は生き生きとし、清められます。では、宣教への熱意を取り戻す過程について見ていきましょう。まずは、聖書のことばと教会の教えから、使徒としての熱意を引き出しましょう。次に、実際に生きている模範、つまり教会内で福音への情熱をよみがえらせた何人かのあかしを見てみましょう。そうすることで、聖霊がわたしたちの中で燃やし続けてほしいと望まれる火を再び燃やせるよう、その模範は助けてくれるでしょう。

今日は少し象徴的な福音のエピソードからお話ししたいと思います。ちょうど先ほど読まれた箇所、使徒マタイへの呼びかけです。マタイ自身がマタイ福音書の中でこの話をしています。先ほど聞いた箇所です（9：9～13参照）。

まずはイエスから始まります。福音書によると、イエスが「男を見かけ」とあります。ありのままのマタイを知る人はほとんどいません。ただ「収税所に座っている」（同9節）人物として知られていました。事実、マタイは徴税人でした。徴税人とは、パレスチナを占領していたローマ帝国に代わって税を集めていた人たちのことです。言い換えると、マタイは人々にとっては敵国に協力する人であり、裏切り者でした。人々がマタイに感じていた軽蔑を想像できます。マタイはいわゆる「徴税人」でした。けれどもイエスの目にマタイは、惨めさと素晴らしさ両面を持った男として映ります。ここで気づいてほしいのは、イエスはそれらの形容詞で止まってしまわれたい、ということです——イエスはいつても名詞を探しておられます。「この人は罪びとで、・・・のような人だ」というのは形容詞です。イエスはその人、その人のところへ向かっていかれ「この人、この男、この女」をご覧ください。イエスは、形容詞ではなく、その本質、名詞をご覧ください。形容詞は脇に置かれます。マタイと人々の間には距離がありました——人々は形容詞である「徴税

人」という部分に目を向けていたからです。しかし一方で、イエスはマタイに近寄りません。なぜなら、すべての人は神に愛されているからです。「このような罪人でさえもですか?」。そうです。このような罪人でさえもです。実際、福音は、まさにこの罪人のためにイエスは来られたと教えています。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(同13節参照)。イエスのこのまなざし、つまりどのような人であっても、愛を受けるに値する人だと見るまなざしは、本当に美しく、これこそ宣教への情熱の始まりです。すべては、このまなざしから始まり、イエスからこのまなざしを学ぶことができます。

こう自問自答してみましょう。他者をどのように見ているだろうか? どれほど多く、他者の必要性にではなく、欠点に目を向けているだろうか? 他者の行いや考えによって、どれほど多く他者にレッテルを貼っているだろうか? キリスト者でさえ、次のようにこころの中で考えます。その人はキリスト者か、違うのか? これはイエスのまなざしとはいえません。イエスはいつもそれぞれの人を、いつくしみと、実際に「大好きだ」という感情をもってご覧になっています。そしてキリスト者は、キリストがなさったようにするよう求められています。キリストのように、特にいわゆる「遠くに離れている者」に目を配るのです。事実、マタイへの呼びかけの話の最後に、イエスはこう言われます。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(同13節)。もしわたしたちが自分を正しい人だと考えるなら、イエスは遠くへ行ってしまうからです。イエスはわたしたちを癒すために、わたしたちの欠点や惨めさに寄り添ってくださるからです。

ですから、すべてはイエスのまなざしから始まるのです。「イエスは男を見かけた」。それがマタイでした。そして次の——第二の歩みとして——動きがあります。最初はイエスのまなざし、つまりイエスをご覧になりました。次に第二の歩み、動きです。マタイが収税所に座っているときに、イエスはこう言われました。「わたしに従いなさい」。すると「彼は立ち上がってイエスに従った」(同9節)。この箇所では、「彼は立ち上がって」という部分が強調されていることが分かります。この細かな点がなぜそんなに重要なのでしょうか? なぜならその当時、座っている者は、その前に立って、彼の言うことを聞く人に対して権限を持っていたからです。あるいは、この場合、税を払うためにいたのでしょうか。ですから、要するに、座っている人には力があつたのです。最初にイエスがなさることは、マタイをその権力から切り離すことです。他者から受け取るために座っているところから、今度は他者に向かわせるように動かしたのです。受け取るためではありません。もう違います。他者に向かつて歩み出したのです。イエスはマタイを権力のある地位から離れさせ、兄弟姉妹たちと同等の立場に置かれました。そして、マタイに奉仕するという視点を開かせたのです。これが、キリストがなさったことで、キリスト者にとっては根本的なことです。イエスの弟子として、わたしたち教会は、人々が来てくれるのを待つて座っていないのでしょうか? あるいは、立ち上がり、他者の元へ行ったり、他者を探したりする方法を分かっているのでしょうか? 「彼らにわたしの元へ来させよう。わたしはここにいる。彼らに来させよう」と言うのは、キリスト教的な発想ではありません。あなたが行って、彼らを探すのです。まずあなたが一步を踏み出すのです。

まずまなざしがあり——イエスが見かけられ、次に行動——「彼は立ちあが(た)」がありました。三つ目は目的地です。立ち上がって、イエスに従った後、マタイはどこへ行くのでしょうか? 一人の男の人生を変えたのだから、その主人は彼を新たな出会いや新たな霊的経験へ導くだろうと想像するかもしれません。違います。あるいは、少なくとも当

面は違います。まず、イエスはマタイの家に行かれます。そこでマタイはイエスのために「盛大な宴会」を準備します。そこには「多くの徴税人」——マタイと同じような人々——が参加します（ルカ5：29参照）。マタイは自分の環境に戻りますが、人が変わって、またイエスとともにその場へ戻ります。マタイの使徒的情熱は、新たな、純粋な場所や理想的な遠く離れた場所で始まったわけではありません。むしろそれとは逆に、元いた場所から、よく知った人々とともに始まりました。ここにわたしたちへのメッセージがあります。わたしたちは完璧になるまで待つ必要はなく、イエスに従って、イエスをあかしするほどまで成長するのを待たなくてもよいのです。わたしたちの宣教は今日、わたしたちがいるここから始まるのです。それに誰かを説得しようとするによって始まるではありません。説得ではないのです。そうではなく、日々わたしたちに向けられ、わたしたちを勇気づけてくださる愛の素晴らしさをあかしすることから始まります。そしてまさにこの素晴らしさ、この素晴らしさを伝えることが、人々を説得することになるのです——わたしたち自身を伝えるのではなく、主ご自身を伝えるのです。わたしたちは主をのべ伝える者です。自分たちを、ではありませんし、政党やイデオロギーを伝えるのでもありません。イエスをのべ伝えるのです。イエスが人々と接触できるようにする必要があります。そしてわたしたちが人々を説得するのではなく、主に説得していただくのです。なぜなら名誉教皇ベネディクト十六世が教えられたように、「教会は改宗に携わることはありません。そうではなく、『魅力』によって成長していくのです」（第五回ラテンアメリカ、カリブ諸国の司教総会の開会でのミサ説教、2007年5月13日、アパレシーダ）。もし改宗に励むキリスト者がいて、改宗させた人数をリストアップしている人がいたら、その行為はキリスト者の行為ではないことを忘れないでください。その人たちはキリスト者を装った異教徒です。こころが異教徒なのです。教会は改宗によって成長していくのではなく、その魅力によって成長していくのです。

かつてブエノスアイレスの病院で、そこで働いていた女子修道会の人数があまりにも少なくなってしまう、病院も経営できなくなったため、その修道会が病院を離れたことを思い出します。そして韓国からシスターたちの共同体がやってきました。その日をはっきり覚えていないのですが、月曜日だとしましょう。月曜日にシスター方は到着しました。病院で働いていたシスター方の家を引き継いで、火曜日には、病院にいる病気の人々を訪問されていました。けれども、シスター方はスペイン語を一言も話されません。彼女たちは韓国語しか話せませんでした。患者の方々は喜んでいました。こう言っていたのです。「よくやってくださった！このシスター方は、素晴らしい。素晴らしい！」「ところでシスターはあなたに何と言われましたか？」「何もおっしゃいませんでした。けれども、そのまなざしがわたしに語りかけてくれました。そしてイエスを伝えてくださったのです」。自分自身を伝えるのではなく、イエスを伝えるのです。まなざしや振る舞いを通して。これが魅力であり、改宗とは逆のものです。

この魅力的なあかし、喜びあふれるあかしは、イエスがその愛あふれるまなざしとイエスの霊がわたしたちのこころに湧き上がらせてくださる外に向かう行動で、わたしたちを導いてくださるゴールなのです。人々を引きつけ、教会に近づけるために、わたしたちのまなざしがイエスのまなざしに似ているかどうかを考えましょう。ともに考えてみましょう。

5月のガラスケースのみ言葉
いま、光は見えないが、それは雲のかなたで輝いている

ヨブ記 37章21節

5月のみ言葉についての解説

中村克徳 神父

人生には様々な予期せぬ出来事が起こるものです。それが喜ばしいものであるならば良いのですが、テレビや新聞、インターネットに飛び込んでくる目を覆いたくなるような悲惨な状況が現実にかかることを、わたしたちは理解しています。もし、心身ともに打ちのめされるような事態が我が身に生じたとすれば、皆さんはどのようにそれを受け止め、対処していくのでしょうか。

ヨブ記の主人公であるヨブは、最も信仰深く、神に忠実な人として知られていました。彼は豊かな財産に恵まれ、日々神に感謝しつつ、罪を犯さずそれを避けることを念頭に置いて生活していたのです。しかし、神の前に御使いたちが集う場に地上を巡回していたサタンも現れ、ヨブのように神に忠実な者はいないと断言する神様に対して、ヨブが信仰深いのはそこに利益があるからであって、もしそれを奪い取られたならば神を呪うに違いない、と主張しました。神からヨブを試みる許しを得たサタンは、ヨブの財産である家畜の群れに壊滅的な被害を与え、息子と娘たちの命を奪うほどの苦難に遭わせたのです。それでも神に忠実であろうとするヨブに対して、サタンは重い皮膚病を患わせ、失意のどん底で神を呪うようにとヨブを更なる苦境に陥れました。

ヨブの災難を耳にした三人の友人はヨブの元を訪れて、当初は慰めの言葉を掛けていたのですが、彼らのやり取りは次第に変化し、罪がない者に対して神が苦難を与えたことに疑問を抱き、ヨブが何か大きな罪を犯したに違いないという観点からヨブを責め始め、罪を認めるよう促す展開に発展します。ヨブは彼らに反論し、自分には罪がないことを声高に主張しました。

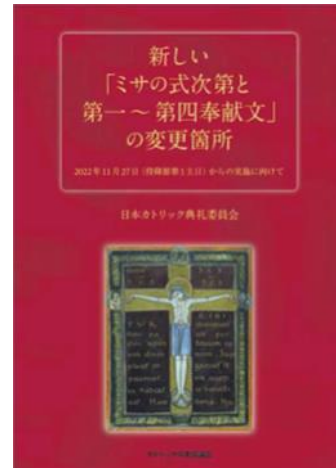
彼らのやり取りの一部始終を見ていた若者エリフは、怒りを表しながらヨブを責め立てます。ヨブの信仰がいびつであり、神を軽んじていることを指摘し、全能である神がどのような方であるかを力強く主張するのです。「いま、光は見えないが、それは雲のかなたで輝いている」というエリフの言葉は、人智の及ばぬ神の現存を表しているのでしょうか。ヨブに対するエリフの責は、ここで終わります。

先の三人の友人による咎め立てに対して雄弁に反論していたヨブは、不思議なことにエリフの言葉には一切の反論を行っていません。ヨブはエリフの厳しい指摘に対して、自分の信仰の足りなさを実感し、彼の主張に屈服したのでしょうか？答えは雲に包まれたままです。

エリフの主張の後に続くのは、主なる神のヨブへの言葉です。エリフの言葉をさらに強めるように、ヨブの神への知識の不足と信仰の足りなさを矢継ぎ早にヨブに投げ掛けます。ヨブは自分の信仰と理解力の不足を認め、一切反論することなく、悔い改めることを誓ったのです。この後、神様の求めに応じてヨブの三人の友人のために祈ったヨブは、その功績が認められて以前の二倍に及ぶ財産を手に入れ、新たな子供たちに恵まれて、以前よりも幸福な人生を送ることができました。

ヨブの身に起こったことをどのように理解したら良いのか、明確に答えを出すことはできません。それは不意の不幸がわたしたちを襲った時も同様です。その出来事は単なる偶然ではなく、神様の何らかの思惑が働いているものと受け止めて、つぶやかずに神への信頼を抱いて前に進んでいくなれば、神様はヨブにしたように、いちばん良い恵みを与えてくださることでしょう。良い時も、悪い時も、神様に信頼を寄せて生きていきたいものです。

主は復活された ハレルヤ！



カトリック中央協議会
ホームページより

4月9日の復活祭のミサは「4年振りに皆で聖歌を歌う復活祭となりました」との中村神父のご挨拶で始まった。その前日までの聖なる過越しの三日間の最後では、主なる神がエジプトで奴隷の身分に落とされて苦しみに喘ぐユダヤの民を救おうと、モーゼに命じてエジプト王ファラオと交渉させ、各家族が小羊を食する過越しの食事を終えた後にエジプトから脱出したように、主イエス・キリストは、神から離れ罪の奴隷に墮している人々を再び神の子供とするために、十字架刑において神の小羊として命をささげたことにより、新しい過越しの業を完成していただきました。

三日目に御復活された主イエスは、墓を訪れたマグダラのマリアに向かって、「マリア」と呼びかけたのであったが、その時には、マグダラのマリアにとっても残された使徒たちにとっても、人智を超えた神秘としか受け取れなかったのです。復活した主イエスと出会った使徒たちは、やがて、イエスが生きておられることを確信し、その教えを広く宣べ伝える道を力強く歩み始めます。一方で、憐み深い神は、最期まで父なる神の御心に従い、受難と死を乗り越えたイエスの従順によって、イエスを信じる人々を神の子とする新しい契約を私たちに与えてくださるのを復活節を通して知ることになるでしょう。

さて、ミサの式次第や典礼文は、今年の待降節から部分的に改訂され、文言をラテン語の規範版により近いものとし、新しい聖歌（ミサ曲）も加えられ、典礼文の唱え方にもメリハリが齎され、ミサの印象は以前よりも明晰・明確になった。新しい典礼文は日本カトリック典礼委員会の“新しい「ミサの式次第と第一～第四奉献文」の変更箇所”（上右図の本、全95ページ）によるものだが、長年、聞きなれた文言や所作・動作、ミサ曲とは異なっているような印象をお持ちの方もおられることでしょう。同じ本のp3～p15にあるように、改訂の基本方針はその原本に当たる「ローマ・ミサ典礼書」規範版第3版（2002年、ラテン語書き）の「忠実な翻訳」となることを目指したものとなった。その改訂箇所と詳細な解説は、p16以降に示されているとおりである。御ミサに与ってじっくりするにはまだ時間を要すると思われるが、神様はわたしたちの祈りを楽しみに待ち続けていてくださいます。共に心からの感謝と賛美を神様にささげていきたいものです。

聖なる過越しの三日間



エレサレムでの聖なる木曜日(4/6)の最後の晩餐の夕べのミサで、イエスは使徒たちの洗足を行って仕える者となられ、翌日の主の受難には十字架の上で裂かれて、「成し遂げられた」と叫んで過越しなされました。復活の主日(4/8 復活の聖なる徹夜祭)には預言通りに墓で復活し、マグダラのマリアに「マリア」と呼びかけられました。今の池田教会には主の洗礼志願者は居りませんでした。聖堂内の信徒の皆様はイエスの過越しに倣って新たな命を賜わるのをお願いしたことでしょう。

大人の日曜学校だより (2月26日)

研修委員会

マタイ4:1~11

イエスは、荒れ野で三度悪魔から誘惑を受けました。その三回ともイエスは聖書の言葉で答えられます。

一つ目の誘惑には「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と答えられます。

前半の言葉はキリスト者でなくても知っている有名なことばです。でも本当に大切なことは「神の言葉で生きるということです」。学生時代プロテスタントの集まりに参加して彼らがたくさんの聖書のことばを暗記しているのに驚きました。私たちにはご聖体がありますが、『みことば』をもっとたくわえて養われる必要があると感じます。

二つ目の誘惑には「あなたの神である

主を試してはならない」と答えられます。

悪魔に対してイエスは上記のように答えられます。悪魔は聖書のことばを使って誘惑します。昨今の宗教の問題についても聖書を何とでも自分に都合のいいように解釈することはおそろしいと思います。いったいどうすれば道から離れずにいけるのでしょうか。

三つ目の誘惑には「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と答えられます

イエスのように40日荒れ野で過ごすことはできませんが、この四旬節の間主に仕えるとはどういうことなのかを考えながら過ごしたいと思います。

大人の日曜学校だより (4月23日)

研修委員会

『イエス御自身が近づいて来て 一緒に歩き始められた』ルカ 24章35節

この日の大人の日曜学校は、復活されたイエス様と気づかず一緒に歩く弟子たちの箇所について皆で分かちあいを行いました。

それまではイエス様の奇跡を見て信じる人が大半でしたが、この箇所の出来ごとは、預言者の言葉や聖書のみ言葉によって見えないのも信じる『教会の時代』が始まったことを私たちに示してくださっていますね。

「イエス様がいつもそばにいてくださる事を強く感じる。」

「『物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち』(ルカ24・25)と弟子たちに言われたイエス様の言葉は自分に言われてる気がした。」

「死から復活されたイエス様がこんなに元気になられて本当に良かったと心が休まった」など、この箇所のみなさんの感想は、特に思い入れが強く、いつもより熱く語られたのが印象に残りました。

『道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』(ルカ24:32)この弟子たちの姿は現代の私たち信徒の姿そのものですね。

この日集まった私たちも、この箇所を語り合うことでこの弟子たちほどではありませんが、同じように心が燃えたように思えました。

燃える心こそが信徒の証(あかし)ではないでしょうか。

イエス様は今、目には見えませんが、み言葉となって、パンとなって、私たちに食べられ、いつも私たちのそばにおられます。「いつも私たちのそばにおられるイエス様、ほんとうにありがとうございます。」そう思えるひと時を、ともに過ごし、ともに分かちあうことが出来ました。

神に感謝。

3年振りに復活祭のパーティーが開かれた

復活の主日(4月9日)のミサ後に、そして卵探しゲームのあと、ほんとうに久しぶりに大勢が集い、ご復活を祝うパーティーが催された。中村神父様がお言葉を述べられ、中路評議会議長が挨拶をされ、百名あまりが参加した。御馳走の持ち寄りはまだ自粛中だったが、池田教会名物のおいしいコーヒーをはじめとして、ボトルの飲み物や個別包装のお菓子がふんだんに並べられた。ハイライトは御受難女子修道会手作りの子羊の形の大きなケーキである。ちょうど誕生日にあたった少年が切り分けて皆に配った。パーティーを用意してくださった奉仕者の方々のおかげで、なごやかな歓談のときを過ごし、ご復活の喜びを胸に、散会した。



宝塚黙想の家からのお知らせ

- 日帰り黙想会 10:00~15:30
5月09日(火) 指導: 稲葉 善章 神父
5月25日(木) 指導: 染野 治雄 神父
5月26日(金) 指導: 山内 十束 神父
- 一泊黙想会
5月09日(火) 17:00~10日(水) 15:30
指導: 稲葉 善章 神父
- カトリック教会のカテキズム
5月10日(水) 10:00 ~ 12:00
5月24日(水) 10:00 ~ 12:00
指導: 染野 治雄 神父
- 聖地エルサレムを学ぶ
5月13日(木) 10:00~12:00
指導: 笹田六合豊 修道士
- ギリシャ語で味わう聖書のことば
5月02日(火) 10:00~12:00
指導: 稲葉 善章 神父
- 聖書の基本
5月03日(水) 10:00 ~ 12:00
5月17日(水) 10:00 ~ 12:00
指導: 山内 十束 神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは
「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797 (84) 3111

今月の表紙の絵について

5月21日の主日は主の昇天のお祝い日。翌週の日曜日は聖霊降臨の主日となる。表紙の絵は、ジョット・ティ・ポンドーネ(1266~1337)が描いた、主の昇天である。イタリアのパドヴァにあるスクロヴェーニ礼拝堂を埋め尽くす、聖母マリアの生涯を描いたジョットのフレスコ画の一枚として、飾られている。ちなみにスクロヴェーニ礼拝堂は、高利貸で財をなしたスクロヴェーニ族のエンリコ・デッリ・スクロヴェーニが建立した。当時高利貸は、秘跡を受けられなくなるほどの重い罪だったので、贖罪のために建てたと言われている。

主の昇天は、マルコによる福音書とルカによる福音書に記されているが、使徒言行録により詳しく述べられている。弟子たちはこの出来事を見て確信し、聖霊のお力を授かって、イエスをあかしするために、苦難の多い宣教の道へ向かったのだった。

編集後記

3年前の今頃は教会には人影がなく、家庭教会で祈り、様々な不安に打ち勝つために緊張して読書に明け暮れていた。新しいノーマルという言葉で抑制を強いられて、目標を掲げて努めるしかなかった。

今、聖堂に入って讚美歌を歌っていると幸いに包まれてくる。変種になりやすいウイルスが共生形になったのか、音楽の流れに身を任せられるようになったのだろうか。

主の平和!

インマヌエル